



たまたま出会った歴史の断片

第三部部长 山田 光徳



昭和二十一年三月二日、海州(中国)からの引揚者一八〇名を乗せた船が仙崎港に入った。彼らの受け入れを支援した奉仕者Ⅱ山口県下

の信徒や教師らは、荷物もなく、垢まみれの引揚者の様子に涙を滲ませたという。翌日には、二二三名の引揚者があった。その中の一人の老女は、奉仕者らの支援に涙を流し、僅かな食料の一部を手渡し謝意を表した。手渡された奉仕者は、苦境の中にも他者を思いやる人間の「尊い場面」に出くわしたことを「何よりのおかげ」としつつ、充分な支援が出来ないことに「恥じ入った」と書き込んでいる。

これらは「引揚事務状況報告」(二十二年四月)の内容の一部である。「外地引揚民救護活動状況報告」(二〇年一二月)によると、二〇年一〇月、引揚船が突然仙崎港に入り、町は引揚者で溢れた。行政対応が混乱する中、見かねた仙崎教会の信徒らは教師に救援を要請し、意を同じくした山口県下の教師らは「金光教関係者連絡所」を組織、その事務所を仙崎教会に設置した。そこを拠点に、本部の経済的援助も得て、彼らは引揚者支援の活動を展開したのである。報告によると、彼らは行政の補助として荷物運びや弁当券の配布などを行い、時には宿泊所として自宅を提供することもあったという。

こうした記録は教務上の報告書という性格からして、もっと簡素かつ概況的な記述で済まし得たろうし、行政から感謝された事実をより強調したとしても不思議ではない。しかしそこで強く書き込まれていたのは、先のような当事者の感触であった。

彼らの活動は既に先行研究(児山真生「引揚教師の『布教』への問い、その意味」紀要『金光教学』第四三三号、平成一五年)で紹介されているが、実際に資料に触れることで、改めて歴史に出会い直す感がある。引揚者の有り様に直面し、居ても立ってもいられず動きだした信徒らに教師が共鳴し、教務を動かし、引揚者への直接的な関わりを生み出した。そんな場面だったことが直に伝わってくる。戦後間もない中で、他者のためにこう

した営みが生まれることに信心のダイナミズムを見る思いがするのは私だけではないだろう。そしてまた、教務上必要な措置だったとはいえ、この当時にあって、しつかり報告書が作成され、保存されていることに今更乍ら感動を覚えずにはられない。

資料が歴史をつくる。そういう面がある。資料がなければ否応なく埋没する歴史があるのだ。一方で、資料があっても埋没する歴史もある。資料を資料として、歴史を歴史として見いだす目がないければ、無いのとそう変わらない。E・H・カー曰く、歴史家は自分が好む事実を手に入れようとする(『歴史とは何か』岩波新書、昭和六三年)。偏った意識は、自然、描く歴史も偏らせる。しかし往々にして自身の意識の偏りは気づきにくい。自身の意識を問い直していくことが重要であり、また同時に、歴史の描き手を多く確保する必要がある。個々の取り組みには限界がある。人の数だけ、関心の数だけ立ち上がる歴史があるはずだが、時として、歴史は一定の理解の「型」に従って享受するばかりのものになりかねない。

右のことをあげたのは、何も上から目線で訴えているわけではなく、私自身が日々、そうして自身をチェックさせられる思いがあるからだ。

実際、私が右の資料に触れ得たのは、後掲で紹介している大石茜先生から、仙崎での取り組みに

関する資料照会があったからだ。こうした偶発的な契機が私にとっての新たな歴史との出会いになり、自身の視界がどれだけのことだったかを知らされるのだから、人との関わりと資料の存在が如何に重要かと改めて思い知らされる。右の資料の引用は私の「好み」に基づくが、きっと大石先生はまた違う歴史の相貌とその意味を示してくれるはずだ。

ちなみに、右の資料の後には「吉備寮児童給食報告」(二二年)といった資料もある。吉備寮長・杉本光夫の報告によると、給食の初回は白米などを提供するべく安価なものを探したが入手できず、止むなく「みかん」になったという。しかしその次には「米飯」が与えられている。杉本は備考に「満腹させてやりたかった」と書き込んでいる。

資料によると、この給食が始まったのは、吉備寮の児童の体格が「憂慮すべき一歩前」という状況にあったからだ。そこで三〇名程度の子どもを対象に週に一度、一人あたり五円を経費として給食がはじまった。こうした資料を読みながら、当時の学校給食や家庭での食事の実際、食糧状況などへの関心を喚起させられつつ、杉本らをはじめ、関わる大人が子どものために奮闘する姿を想像し、有難く、応援する心持ちにもなる。

吉備寮は、戦災、引揚によって行き場を失った教師らが再起するまでの生活拠点として本部が

提供した宿舎(二〇年一二月開設)である。先行研究(前掲兎山)から、教師のみならず、その家族、子どもがいたことは読み取れるが、こうした資料に触れることで、改めてその当たり前の事実インパクトを感じる。

夏にはスイカが給食として与えられたようだ。スイカは児童が欲しがり、杉本は高価なため躊躇したが「食べさせたかった」のだという。改めて、痩せ細った子どもたちの戦中・戦後の経験とは如何なるものであったか。スイカを食べて、子どもたちは喜んでくれただろうか。杉本自身も引き揚げてきた教師である。こうした取り組みを通じて、彼は何を経験したのかと、関心呼び起こされる。

研究には課題があり、方法があり、それによって否応なく漏れ落ちる歴史の断片もある。そうした断片を抱えたままの研究者はおそらく多い。そしておそらくそれ以上に、誰にも触れられず光を見ない歴史の断片が、所内の棚の中に、各地の教会に、個々人の手元に、未だ眠っているだろう。資料の数だけ立ち上がる歴史があるといつてよく、描き得てきた歴史は決して全体ではない。であれば、私たちは何を歴史とするのかを当の歴史から問われているのだろう。歴史の広がりや深まりは、信心の味わいを豊かにしてくれる。だからこそ、絶えず歴史を探り、問い直す営みが重要だと改めて思う。そしてその営みを支えるのは、一つ一つの記録であり、意外と人と人との関わりで

あったりする。

周知のように、近年本所では、本教の信心をめぐる資料が適切に保全・活用されていくために、今私たちが何をすべきかを考え、動いてきている。信心の歴史が、人々の思いが、人知れず消えていかなないように、私たちの見える世界が決まりきってしまわないように、少しずつでも、関わり合いを絶やさず、できることからやっていきたいと思う。

(岡山・新見教会)



◆令和八年度の計画◆

本年度は、所長以下総勢一四名でのスタートとなりました。以下、主な取り組みを紹介いたします。

紀要論文講読セミナー

【場所】金光北ウイング光風館研修室

【日時】各回 一三：〇〇～一五：〇〇

これまでの研究成果を全教の皆様と共に学びなおす機会として、紀要論文講読セミナーを開催します。初めて論文に触れる方も意識した取り組みです。本年度は、下記の予定で3回開講いたします。参加希望の場合は事前にご連絡下さい。

なお、開講日・内容などが変更となった場合には、金光新聞や金光教本部HP、教学研究soH Pなどを通じて随時ご案内いたします。

〈実施済み〉

第一回 五月一〇日(日) 担当・濱田裕太郎

福嶋義次による「事蹟解釈」について

(対象論文：第八号、第九号、第一〇号)

〈予定〉

第二回 七月一〇日(金) 担当・水野照雄

水野照雄「金光大神の晩年における天地書附の

意義と取次の姿勢」(第四〇号)

第三回 一一月一〇日(水) 開催予定

※詳細が決まり次第、教報HP等でお知らせいたします。

第三回教団の文書管理に関する懇談会

【場所】本部総合庁舎会議室

【日時】六月一日(月) 一四：〇〇～

今年度より、本部教庁総務部の主催となりました。本部からの要請に応じて本所からも出席し、昨年度に引き続き、教団における文書管理の現状と課題を共有し、各機関の皆様と意見交換を行いました。

第六五回教学研究会 〈予定〉

【場所】金光北ウイングやつなみホール

【日時】六月一九日(金)

本年も来場参加とオンライン参加を併用する形で開催します。内容は、個別の研究発表と全体会を予定しています。全体会では、「へつながり」を問い直す―信心のありか、そのゆくえ―をテーマに、嘱託斎藤文彦氏(龍谷大学教授)による講演に続いて、所内外からのコメント、全体討議を行います。

第二七回教学講演会 〈予定〉

紀要第六六号の研究成果を題材にした教学講演

会を予定しています。場所・日時等、詳細が決まり次第、改めてご案内いたします。

第二〇回教学に関する交流集会 〈予定〉

【場所】未定

【日時】一一月

信奉者との討議や意見交換の場を通じた、教学研究の意義と役割の周知並びに要望の徴集を願う取り組みです。詳細が決まり次第、改めてご案内いたします。

この他、継続して研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実を図ってまいります。

また、例年、広く現代の問題関心との連関を深めながら、研究内容の充実を図るべく、一般諸学問や他の教宗派との研究交流を行っています。

これらの取り組みを通じて、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培ってまいりたいと存じます。

◆令和八年度研究題目◆

〈第一部 教祖に関する研究〉

・金光大神における経済的所有観念
―地租改正前後の神把握に向けて―

所員 白石淳平

・金光大神の金銭関係記録と金光萩雄の「金銀出入帳」
―「家」「神職」に注目して―

所員 堀江道広

〈第二部 教義に関する研究〉

・東日本大震災と本教の神観・救済観
―教義の価値付けを問い直す―

所員 高橋昌之

〈第三部 教団史に関する研究〉

・個々人の歩みに捉える本教戦後史
―聴取調査を手がかりに―

所員 山田光徳

・メディアをめぐる経験の諸相とその意味
―昭和五〇年代を中心に―

所員 須寄真治

提言

「不正義な助かり」に対する
恐れと責任

研究員 井上 真之



教学研究所職員の皆様には、日々教学研究の御用に尽力くださり、ありがとうございます。教典や教典に関する図書、紀要論文など教学研究所の

長年にわたる研究成果を通して、今日私たちが教祖様のご信心を深く知ることができ、信心の稽古と吟味をさせていただけることはとても有難く、幸せなことに存じます。

私は教会の御用を主としながら、関西福祉大学やLGBTに関する御用に使っていたいてきました。大学やLGBTの御用からは、人権や福祉哲学の学びを得てきました。その中で、私は個人（自分）の「幸・不幸」や感謝の度合いなど、心の軸ばかりに焦点を当てて信心の稽古をするあまり、難儀の発生要因の可能性としてある、社会における「平等・不平等」あるいは「正義・不正義」という軸に対する

視点が脱落していたことに気づきました。経済学・哲学者アマルティア・センは「逆境にある人は暮らしを耐えうるようにするために、精神構造や願望を環境に合わせようとしてしまう。希望を持てないほど虐げられた人々は、小さな慈善にも大きな喜びを見いだせるように自分自身を訓練している」と指摘した上で、ケイパビリティ（人生の選択肢）の概念を提示します。そして、今日世界的にみて、平等に保障すべきはケイパビリティであると言われていきます。この学びと私の当事者としての経験から考えさせられるのは、不正義な環境の中で感謝や喜び、信心辛抱といった心の稽古のみを継続する営みは、その感謝や幸福感が本心であったとしても、不正義な環境の維持・補強に皮肉にも貢献してしまうことです。それによって、結果的に総氏子の本当の助かりや神様の御思いから遠のくのではないか、という問いと恐れを抱いてきました。

また、他の「不正義な助かり」については、宗教団体に関連する様々な悲惨な事件や歴史から、信仰に基づいた活動が、ある個人や集団を助からない状態に陥らせ、その上に教団が成立しているという実例が明らかにされてきました。喩えるなら、1人の不当な犠牲の上に九十九人の「助かり」と信仰の正当性を築くようなもので、九十九人の「助かり」の圧倒的な光の陰に押し込まれた「その1人」は深い絶望の中で「声」が封殺されていきます。宗教は、このようなマイナス面の発生可能性と真摯に向き合う責任があることを、

その危険性の認知とともに社会から訴えられてきたように思います。ちなみに、マイナス面に対する責任は宗教だけに課せられていません。司法であれば冤罪医療であれば医療過誤など人間の不完全性を前提として、職務によって生じるマイナスの発生防止や予防に向けた知や技術の向上・仕組みづくりが、各職業の責任として取り組まれています。

金光教では御取次の神聖性を基調としつつも、「凡夫の自覚」という、人間の不完全性に立脚した信心を教祖様が示されています。この自覚に立つて、マイナスが生じる可能性と向き合う責任と役割は、教学研究所が中心となって、信心を絶えず吟味するという教学の営みを通して果たされてきた部分が大きいのではないのでしょうか。教学研究では教祖様のご信心やその社会的背景、各時代の制約の中で信心や御用がどのように展開してきたのか、先師たちの葛藤も含めつづさに掬い、明らかにし続けて下さっています。その成果からは、事象の安易な評価を避けながら、丁寧に時間をかけて取り組む謙虚な研究姿勢が窺い知れます。私はこの教学の営みに、「不正義な助かり」に疑義を呈して「総氏子の真の助かり」へと転じさせようとするはたらきと、その実現のためのポテンシャルを感じます。神様の願いの中で教学研究所の御用が不断に続き、研究所の重要性の理解が研究成果とともに益々広まることを願っています。

（兵庫・加里屋教会）

神様と教祖様の

世界の空間がそこにあった

—金乃神様金子御さしむけ覚帳

御金神様御さしむけ金銭出入帳を

見て、読んで、感じて—

松井 教子

研究所では、昨年の秋に、『金光大神直筆・研究資料「金乃神様金子御さしむけ覚帳」「御金神様御さしむけ金銭出入帳」を発行させて頂きました。

今までとは違った角度から、教祖様のお姿が見えてくるような資料であります。この度、松井教子先生(宮之城教会)が、この新しく発刊された資料と出会った時の感動を、届けてくださいました。松井先生は、研究所で御用されたことはありませんが、所外の方がこんなにも喜んでくださると、研究所としても、大変嬉しく思います。松井先生、ありがとうございます。

それでは、先生の熱い思いのこもった感動をお届けいたします。

○お帳面を目にして



昨年の秋のご大祭時に、

教祖様直筆の二つのお帳面が収録された『金光大神直筆・研究資料金乃神様金子御さしむけ覚帳 御金神様御さしむけ金銭出入帳』が全教の教会に配布され、十二月の布教功労者報徳祭並びに金光平輝君一年祭時には、その原資料が教庁展示ホールで公開された。

「是非、直接自分の目で見たい」、そう思って展示ホールに赴いた私に、不思議なことが起きた。「金乃神様金子御さしむけ覚帳(金子覚帳と略称)」と「御金神様御さしむけ金銭出入帳(金銭出入帳と略称)」のお帳面を目の前にしたら、墨の濃淡に応じて、書かれた文字が浮かび上がってきたのである。次の瞬間、お帳面を眺めておられる羽織袴のお姿が目に入り、かと思うと、私はいつの間にか展示ケースをすり抜けて、その方の横にいた。すると、その方から声が、「この二つのお帳面は、どう伝わるのだろうか。どうわかってもらえるのだろうか?」と。

その翌日のことである。頭上には、青く青く澄みわたった空が広がっていた。私は、御本部の境内で落葉拾いをしながら、時折、手を休め、空を見上げていたのだが、ふとこんな言葉が口をつい

て出てきた。「ああ、教祖様がこの地で神様と出会われたんだ。この地にお広前ができ、この地がお広前になっていったんだ。そして、現在ここに繋がっているんだな」。いろんな人達が教祖様の元へ、次から次へと訪れてのこと。そんな人達の話し声や足音も聞こえてくるようだった。

さて、この二つのお帳面が教会に配布され、最初に手にした時、私は「教祖様にお会いできる」というワクワクドキドキの緊張感とうれしさでいっぱいになった。でも、何だかよくわからない、妙な気分も同時にあった。「お帳面に、『金子』や『金銭』という字が当てられているけれど、それが意味するのは何なのだろう、『御さしむけ』の言葉にどう関係しているのだろうか?」。

そんな思いを抱きながら、お帳面をめくっていたら、ついこんな言葉が出てしまった。「教祖様が、このお帳面を書いておられる瞬間の空気が違う」と。余白や白紙のページを見たせいかもしれない。それにしても、「とりかえ」、「むしろ」、「〇〇屋」とか、なじみのないお金の種類など、わからないことばかりが書かれている。「いきなりじゃ無理だ、心しなければ」と、「資料解説」から読み始めた。ちょうどその頃、研究所主催の交流集会(同年十一月十五日)が、このお帳面を扱うことを聞き、参加したいと願ったが、残念! 願いは叶わなかった。そのこともあって「もっと知りたい」という思いは、いつそう強いものになっていったのだった。

私は、再び初めから、じっくり読ませていただくことを決めた。それが、令和八年早々のことである。



○物語を読むように

まずは、「金子覚帳」から。ゆっくりとでもいいから、物語を読むように、日付と内容を見ていくことにした。

このお帳面は、教祖様が立教神伝を受けられ、お広前に専念された二ヶ月後、安政六年十二月から書かれている。お金を「取りかえ」（用立て）してもらおうとして訪れた人々の様子が記載されている。どうも、変な気になってしまふ。ご参拝が目的じゃなく、商人が金銭を工面してもらったり、米との取りかえをしてもらったりしているのだから。多くのわらじを売りに来た行商人も登場する。お金を失く

したので用立てを乞う人もいるし、生活苦からか、親子でやって来て援助を乞う人もいる。このように、書かれているのは、ほとんど教祖様がお金を援助される様子なのである。

日付をみても、大晦日、大晦日夜、正月など。まるで、日本昔話の笠地蔵の話のようだ。正月を迎えるにあたり、何も手元がない人たちだったろう。笠地蔵の話なら、売ろうとした笠はある。しかし、売る笠さえない人も、教祖様のもとを訪れているではないか。

立教神伝には「農業へ出、人が願ひ出、呼びに来、もどり。願ひがすみ、また、農へ出、またも呼びに来」とある。立教神伝が神様から下がったのも、教祖様のもとに多くの人々が訪れていたからこそだが、何も参拝者だけじゃなかったことになる。「呼びに来、もどり」をするところに、金銭の都合がつかなくて困っている人も多く含まれていたのだった。お帳面で確認できるのが、援助された人に限られていて、断った人のことはほとんど書かれていないはずだ。そうとすれば、想像以上に大勢の人が訪れていたかもしれない。

修験者も、そんな人に紛れて出てくる。彼らは、お金や品物（お供え物）等を、「むしん」しようとして来ていたのだった。今まで、修験者は、教祖様の布教の邪魔をする人達とばかり思っていた。そのため、吉田家、白川家にお金を支払って、正式に神主職を取得したり、修験道の五流尊灌院にお金を払って免状を得たりし

たのは知っていた。でも、修験者達が、教祖様の所へ「むしん」に訪れていたことは、想像にしかなかった。嘘をついてまで来た人（「みなうそ」と記されている）、二度名前を変えてまで来た人（「二度かり」）、無理にお金を借りていった人（「むりかり」）、断わってもきかない人（「御断聞き済みなし」）、さらに、食事にあづかった人、子供と共に泊まった人（「子とまり」）等、それら人々にいくら援助したか、そのことが「志覚帳」として取り上げられている。

きっと教祖様は、「おかしいなあ。これでいいのかなあ」と思われただろう。それでも、神様からの「おさしむけ」として、お金を融通されていたのである。『研究資料』の最後（「おわりに」）には、こんな文章がある。

「おう、近えうちに、大谷あたりへ商えに出かけるんじやって？…だまされた思うて、（金神さんのところへ）行ってみいや。…こんな声が聞こえてきそうです」。

それを読んだ当初は、正直ピンとこなかった。だが、「金子覚帳」を読み進めているうちに、その声がざわざわと耳に響き渡ってきた。そこから、訪れる人々の表情さえ見えるようになり、涙が出、胸が詰まった。きっと、神様がその人々の先の助かりを願いをされている。そう思うと、「金子覚帳」の表紙に書かれている文言の意味も、きわやかに浮かび上がるようになった。

○「はっ！」とする思いが

次に、「金銭出入帳」に目を通していった。そのお帳面は、安政四年十月十三日の、いわゆる「神の頼みはじめ」の事蹟のことから書き始められている。

「金神様おかげのはじめは、亀山弟繁右衛門御乗り移り付き、私ども呼びに出、参り…」

これを読んだとき、なぜか、教祖様が涙を流しながら書かれている気がし、私も涙がこぼれてしまった。この事蹟が「神の頼みはじめ」とされるのは、「覚帳」や「覚書」の「慶応三年十一月二十四日」の条に、「いよいよ当年までで神の頼みはじめから十一ヶ年に相成り候」とあって、安政四年のその日を回想されていることが理由とされている。

一方、「金銭出入帳」の表紙の記述を見ると、このお帳面を書き始めるのが慶応四年九月三日のお知らせによっているとわかり、そして表紙をめくった最初のページで、安政四年のその日のことが「金神様おかげのはじめ」と捉え直されていた。

きつと教祖様は、慶応四年九月三日のお知らせによって、安政四年のその日のことが「金神様おかげのはじめ」だったと確信され、書き出されたに違いない。慶応四年のお知らせで、「はっ！」と思に至る、そんな確信は、教祖様にとってどれほどのことだったろうか。こんな確信は、教祖様にとって涙まで誘うものだったのではないか。そう思うと、そのことを「はっ！」と思に至った私の涙も、教祖様の流された涙に感じられた。

少し、私自身のことも述べてみたい。私にとって、

“神様のおかげのはじめ”は、いつの、どんな事だったか。どうも、私が生まれてきた時の事に思えて仕方がない。病弱な母が妊娠したとき、医者が制止したにもかかわらず、母は「神様からいただいた子だから、神様から産ませていただく」と思い定めたという。そうして仮死状態でこの世に生まれた私は、誕生日毎に、教会の先生や両親からそのときの様子を聞かされて育った。改めて、それを“神様のおかげのはじめ”と捉え返すと、「はっ！」とするような衝撃が体に走るのである。

話を戻すと、「金銭出入帳」には、教祖様の神職資格取得、宮建築や、浅吉さんの仕官のための費用等、安政四年から明治四年までの支出が書かれており、表紙にあるように次々と御神号を神様からの「おさしむけ」としていただかれた歩みにも対応している。

ある時のこと、私は、「金銭出入帳」の表紙から目が離せなくなつた。というのも、表紙が、私に「みて！みて！」と語りかけてきたからである。じーっとみつめてみると、またまた目頭が熱くなつて、涙が出そうになつた。教祖様が「金銭出入帳」の表紙を書かれているお姿が浮かんできたからだ。それは、安政四年から、神様からのおさしむけとしていただかれてきたご自身の歩みをひとつひとつ振り返りながら書かれているリアルなお姿だった。



○教祖様のみ思いって？

ところで、明治四年に、教祖様は神職資格を失われている。「覚書」「覚帳」どちらにも、六角畳を取り上げられたこと、そして「どのような不時あつても苦世話にすな」(『金光教教典』五十三頁／九十三頁)というお知らせがあつたことが書かれている。しかし、どういうことで、神職資格を失われたのかは、よくわからず、理由を探しているうちに、教師セミナー「立教百六十年記念講話」⑤「信心の「今」教祖様の「今」」(『金光教報天地』二〇二〇年五月号)に行き当たった。

それには、明治四年、浅尾藩からの通達があった、藩内の神職、僧侶に対し、等級が廃止され、村方へ帰属するよう措置がとられた、と述べられていた。「永世御用記」という庄屋小野家の資料にあるそうだが、神勤はこれまでどおり許可されても、神職廃止（明治四年十月十五日）されたという理由が、これによって領けた。私の疑問も解け、目の前の霧が一気に晴れ渡り、この二つのお帳面を読み進めることができた。

とはいえ、教祖様が、神職資格を失うなんて、お心は激しく揺れ動かれたであろう。その御様子がひしひしと感じられ、私の心までざわざわとしてくる。でも、ほんとうのところはどうなのだろう。この明治四年に、二つのお帳面は終わっている、よくわからない。

この年でお帳面が終わっている点に関わって、私が興味深く思っていることがある。それは、その年の十二月二十三日に、神様から「…前後とも書き出し」とお知らせをうけて、「金光大神年譜帳」が書き始められていることである。その書き出しにも、安政四年十月十三日の事蹟のことが触れられていて、「おかげと知り」、「御心神仕り、おかげ下されありがたし、仕あわせに存じ奉り候」と述べられている。

私が思うに、明治四年は、神様との関わりを新たな深いものにされていく転換点ではないか。神職資格を失う、この年を期に、神職を頼りにして

「人を助ける」御用ではなく、「人の助かる働き、取次をまん中にした御用」に移行されたのではないか。そう思うと、「金銭出入帳」最後の二八丁表で、教祖様が安政四年から農業をしながらおかげを受けてきたこと等、穏やかな優しい表情で書かれているような気がしないでもない。

そこからいろんなことが想像される。たとえば「金銭出入帳」の表紙がどう書かれたのか、といったこと。表紙を書く直前に、少し思い返しながら書いてみられ、そこで表紙の名称を決めて書かれたか。あるいは、その反対に表紙を書いたあと、一番右側に、「内は巳の十月十三日…」の一行を足され、その後、二八丁表を続けて書いていかれたのか。はたまた、最後二九丁の前に、表紙を書いてお帳面として綴られたのか。いろいろ興味を抱かせられている。

さらに、表紙で言えば、真ん中に「御金神様御さしむけ一乃弟子」と書かれているが、安政五年九月二十三日に「もらいうけ」され、一乃弟子となり御金神様に帰属している教祖様にとって、「身元は、御金神様ですよ」と、自らのお立場を表す重要な言葉になっているのではないか。神職資格を失われたあとも御金神様は、教祖様に対し、「ずーっと、私（御金神様）の一乃弟子ですよ」と言われている気がするのである。それがあって、教祖様が、神職資格を失っても、「ありがたし」と思っておられるのではないか。

○宮建築をお金から見ると

ところで、この二つのお帳面には、宮建築の事も書かれている。特に「金子覚帳」には、「覚書」や「覚帳」より詳しく、金銭の支出のことが詳しく書かれている。なかには、棟梁である川崎元右衛門や橋本卯平等の金銭の使いこみ、横領のことも。にもかかわらず教祖様は、その度に、疑いはこちらつても、「この二人は生活に困っているのでは」と思ったりして、建築費用の他にもいろいろ工面されているのである。

しかし、二人の行いがあまりにもひどかったのか、「金子覚帳」には、「神様大きに御気障り、金光願うなかなわんと仰せつけられ」（明治元年〈慶応四年〉四月十六日）と書かれていて、以降、宮の建築は中断しているのである。

「金銭出入帳」によれば、宮建築は、「金乃神様御さしむけ御宮社事、世話人願ひ」とあって、世話人の願ひを受けての金銭支出とされている。加えて、「日本に金神の宮社なし、この度氏子たすけてやり。参り場所建て、世話人願ひ」（二二丁裏）とも。「覚書」には、宮建築の事が、「こしらえて、お上がかなわねばどこへでも宮のいるという所へやるけにかまわん。こしらえたいせい。お上がかのうて建てば、其の方の宮。天地乃神が宮へ入りておつては、この世が闇になり。正真、氏子の願ひ礼場所。…あいよかけよで頼み合いたし」と書かれているが、「金銭出入帳」では、宮の意義

については、そこまで詳しくは書かれていない。

「覚書」は、明治七年以降に執筆されているが、「金銭出入帳」は、慶応四年から明治四年までであり、宮建築に関しては、あとに続く二二丁裏が白紙になっており、その受け止め方を考えておられるように見えてくる。きつと、このお帳面を書かれながら、時折、これでいいのかと迷い、考え直しをされたのではないか。

「覚書」(『金光教教典』四十九頁)には、宮建築中断に関し、「委細の儀は、普請帳に書きだし」とある。はたして、「普請帳」というお帳面とは、この「金子覚帳」の一部なのか、それとも、あとで整理合本されたという「金銭出入帳」の一部なのか、気になるところである。

さて、「金銭出入帳」には、金銭初穂の集計がなされており、安政六年、広前奉仕をされたその年から、「願主初穂覚付」として書かれている。年毎に集計されたり、何年分かまとめて集計されもしている。

江戸時代末期の貨幣は、金・銀・銭で、なかでも銀貨は秤量貨幣である。金・銀・銭の使い分けは、相手や用途によって違いがあり、金貨、銀貨、銅貨が発行されるも、金・銀鑄造不足になり、不換紙幣が発行されたりもしたという。また、明治政府によって、明治四年に新貨条例が制定され(円銭厘の十進法採用)るので、集計、換算も複雑だったろう。集計でみられる緡銭(さし)一本

は、九十六文だったのが、慶応二年には、一本百四十文、明治元年には一本二百文となり、インフレーションをきたしており、教祖様もお初穂の集計には、たいへん面倒な思いをされながら計算されたと思われる。それでも、ここにお初穂集計をあげておられることで、それだけ神様に対するお礼お願いの参拝者が多かった様子を窺い知ることにもなっている。

〇ご家族のこと

家族に関しては、教祖様は、浅吉さんはじめ子供さん方の事を大切に願っておられる。自分が川手家へ養子にこられた時、条次郎さんに連れられ、金比羅様へお参りしたこともあり(教祖様十三才)、それを思っつか、浅吉さんを連れて、金比羅様へお参り(浅吉さん十二才)したり、厳島神社にもお参り(浅吉さん十三才)していることが、『金光大神事蹟に関する研究資料』の「社寺参拝に関する記録」に書かれている。親としての思いから、浅吉さんに期待をかけておられるようだ。しかし、それにもかかわらず、浅吉さんは、博奕にのめりこみ、いろんな人からお金を借りている。教祖様のお心は辛かったろう。その場の持ちあわせのお金や反物まで差し出したばかりか、人からお金を借りたり、養母イワさんの衣さえも質に入

子供を思う気持ちは、教祖様も私たちも、親として同じ。そんな浅吉さんは、神様の願いをうけ、慶応元年十月十日に一乃弟子を頂かれており、そのことを教祖様は「ありがたし」と述べておられる。とはいえ、その後も「金銭多分」に使って、神様との関わりをおかしくしている。神様に対して、「親としてそれでよいのか」と、本心に心が震え、神様に申し訳ないという心持と、神様との関わりを信じて生きてきたのに、「どうしてこういうことになったのか」と思い続けられていただろう。

それもあつてか、慶応四年三月三日、浅吉さんが江戸より帰国した際、「天地金乃神様おかげで、御上つとめ」ることに、「御神様御助けに相成、御許し金光正神と申し」と、諸手を挙げて喜ばれている。その様子は、「聞明治元年慶応四年四月朔日、御上様、徒士役仰せ付けられ 高五石下され候 金光浅吉」と記されるところからも伝わってくる。この二つは、教祖様の書かれている筆使いも文字が太く大きく、墨も濃い。どんなにうれしく、喜んで書かれたことか。心底からの喜びがひしひしと伝わってくるのである。きつと教祖様は、一連の浅吉さんに起こっている難儀なことも、神様のおかげのなかでのことだと確信されたであろう。神様との関わりを信じて生きてきたことが「間違いない」こととして実感されたのだ。

○「お金」とは何か？

私は、先に、これら二つのお帳面の表紙に、「金子」と「金銭」といったお金をさす文字に疑問を抱いたと書いた。私がふだんから見知っている教祖様の様子からしても、また「お供えは、真心が大切」といったような子供の頃から聞いてきた教えからも、お金のことに触れられているのは、異質な感じを覚えたのである。

とはいえ、二つのお帳面に書かれているのは、実際、お金のことばかりである。神様からのおさしむけとして、近隣者やむしんに来た修験者らに、お金を用立てたり、施しを与えたりされている。神職資格を得るための費用、神職家として藩への献金、礼金もあり、そして宮建築の費用も書かれている。また、浅吉さん仕官のための費用や、浅吉屈財の返金、横領していると思われる大工棟梁達のためにもお金が出たり…。実に多岐にわたって、広前の奉獻金を用立てられている。

そうなれば、このお金（金銭）とは、何ものなのか。今まで考えてもみない疑問に、私は、ぶつかっていた。

図書館で、「お金とは？」と、辞書辞典で調べてみても、ほぼ明快な回答はみつからない。司書の先生によると、現在は、お金の儲かり方のような本ばかりのことだった。哲学のところで調べると、「お金を自分のために働かせる」と書いている著者もいた。お金について、「子供たちに教育をしていない現実が

ある」とも語られていた。そこで、スマートフォンのAI検索してみると、単なる物理的な紙や金属ではなく、社会的な「信頼」によって機能する交換手段（価値の尺度媒体）だという。哲学的には、物質的な実体をこえた社会的な「信用」と「価値の尺度」とも書いてある。また、図書館で読んだ『小学四年生から始めるおこづかいお金の話』（柴山賢二、秀和システム新社二〇二五年）によると、お金の役割とは、①ものやサービスと交換できる、②物の価値をあらわすことができる、③価値を保存することができる、それに加えて、お金は、信用がとつても大事と記されている。そこには、ニセ札等がでまわり、みんながお金を信じなくなると、買物もできず、貯金もできず、物々交換の時代にもどるとまで書かれていた。「お金の価値は、信用の価値なのか」、考えれば考えるほど、混乱しきりである。



○深まっていく教祖様と神様との関わり

教祖様が、神様からの「おさしむけ」を受け、金銭を用立てしたり、いろんなことに使われているのは、神様から、金銭という「信用の価値」「信じること」の本当の意味を確かめるよう、促されているのだろうか。

教祖様は、お広前に専念された安政六年から、金銭初穂のことを書いていかれ、その二ヶ月後から、商人や生活苦の人々への援助、修験者のむしんへの対応、また、弟繁右衛門さんへの援助などもされている。それもすべて、神様が、その方々の先の助かりを願っていること。教祖様は、神様を信じている、その実質を、自分の行為で表そうとされていたのではないか。

浅吉さんが博奕にうちこみすぎて借財が多くなろうとも、後に失うこととなる神職資格などに多額の費用をかけても、また宮建築が棟梁の解雇等により中断されて、まさに無駄金になったとしても、そのこと自体が、神様を信じていることを行為で示すものであり、金銭使用の場面で表されていたことになる。

「金銭出入帳」には、元治元年四月九日、修験道の本山である大峰山参りからの帰りのところで、「みな神様の銭、神様末の為、御さしむけ」と記されている。そこには、神様を信じる、そのことへの教祖様のご覚悟も現れているようである。

このように、私は、神様との関わりを信じることの確かさが、金銭使用の場面で試されているように見えていった。「おかげのはじめ」として、「金銭出入帳」



の初めに、教祖様は、弟・香取重右衛門の宅替えに必要な費用や、そのあとの普請にかかった費用も書かれていることも、そう。どうも神様は、初めから教祖様との深い関わりを見越した上で、金銭を頼んで来られたのではなく、教祖様の頼みの受け方を見て関わりを太く強いものにされていったのではない。

教祖様の頼みの受け方を見ていくと、「じゃあ私は、どうなんだろうか？」と考えさせられる。金子の用立ても、神様の「おさしむけ」とされる、そんな大きな心になれるのだろうか。この文章冒頭に書いたように、お広前を青い青い空の下でいたでいていけるような、寛大な天地のような広い心になっていけるんだらうか。余白や白紙があるのは、教祖様が、迷われたり、考え直しをされていたからではないかと書いたのだが、それは「これでいいのか」という思いが作る、今の自分の心の空白のようにも思えてしまう。

○「信じること」の価値

今年、初めて雪が積もったとき、一面雪で真っ白、心も真っ白で、御祈念させてもらっていると、「信じきる」という言葉が、心に浮かび、そしてさらに、この二つのお帳面が浮かんできた。「はっ！」とした。私は、このお帳面を通して、そしてこのお帳面の記事から、「神様を信じきる」ということを教えてもらっていたのだった。「そうだ！このお帳面は、生きている」、そんな思いとともに。

私がお帳面を初めて開いた時、つい口をついて「教祖様が、このお帳面を書いておられる瞬間の空気が違う」という言葉が出たと言ったが、改めて述べたいのは、「瞬間の空気が違う」というその「違い」は、ふだん自分たちが信心で思い浮かべている光景とは異質な、お金使いの様子が書かれていることが理由ではないということ。もっと大きなことである。言ってみるならば、神様と教祖様との強い関わり合い、そのことを、金銭が使われる場面、一見、下世話だと思われるとしても、そんな場面を振り返る際に、「はっ！」と思い至る、その瞬間と驚きに直結する「違い」である。

それにしても、あたかも初めてのように、「はっ！」と思い至るような、神様との出会いの確かめの感覚は、教祖様にとってどんなものだったろうか。教祖様は、出会いをどう感じ、どう確かめられたのだろうか。「わからない。何とって表現し

たらよいか」と、戸惑いのなかでのことにも思える。言葉では追いつかない、表現できないような、その「感じ」は、どんなに驚くことだったか。「おさしむけ」という金銭やりとりが、きっとそんな「信じることの価値」を発見させる具体的現場だったのだろう。

ところで、音速の単位でも知られ、教祖様と同時代に生きていた、オーストリアの物理学者・哲学者であるエルンスト・マッハは、「関係(函数)という間を見た人だ」と、ある方から教えてもらったことを思い出した。「マッハの空間は、物質的『場』としてのポジティブな実在性！」だと、マッハの『認識の分析』(二〇〇八年叢書ウニベルシタス七四〇)を翻訳した廣松渉氏が同書の最後、訳者附録「マッハの哲学と相対性理論―ニュートン物理学に対する批判に即して」の中で述べている。

私は、このお帳面二つは、マッハのいう「場」としての空間のようなものに見える。教祖様が神様と深く関わっていかれ、信じぬかれ、信じきって行かれている。そうした神様と教祖様との世界の函数空間が、お帳面の姿に現われているのではない。それによって、初めて手に取り、ページをめくり、見た時、「教祖様がこのお帳面を書いておられる瞬間の空気が違う」の言葉を、私の口から出させたのではない。「そうか。こういうことだったのか」と、一人、納得させられている。



○教祖様から手を繋いでもらった！

私は、この資料、二つのお帳面を手にして、読ませていただき、本当に理解できたかどうかは、心許ないが、それよりも何よりも、ありがたく感じたのは、教祖様と手を繋いでもらったと思えたことだった。神様を信じきられて、神様と手を繋かれた教祖様がおられる。だから、私も神様と繋

がった。今更と思われるかもしれない。神様は、教祖様の手を離されないし、教祖様も離されない。教祖様は、私が離さない限り、私の手をしっかりと繋いで下さっている。

今年、啓蟄も過ぎ、春の匂いを感じながら、スマートフォンに納めたお帳面の画像を、ゆったりとした心持ちで見ている。ちょうど、「金銭出入帳」の二四丁裏と二五丁表が映しだされた。「えーっ!」、なんと「みな神様の銭。神様末の為、御さしむけ」が書かれていたページだった。

あの時、教祖様らしきお姿の方が、「わかってくれるかな。伝わるかな」と言われていたのは、「このことかだったかも」と、思わされた。私が、私こそが、神様を教祖様を信じきる覚悟をいただかねばならない。持ち続けねばならない。なんと言つても、教祖様が神様と出会われ、信じきられたそのおかげで今の自分もある。この思い、感じは、私にとって何よりも事実だ。

まだまだ理解できていないことばかりが多いが、今、空を見上げ、みつめ、ご地面様を拝み、みつめる時、今までよりも、心が一層近くなったように、天地の間に、教祖様と手を繋がせてもらい、天地金乃神様の光の中に生かされていることを実感できるような気がしてならない。

私は思う。教祖様直筆とある、この二つのお帳面は、「覚帳」、「覚書」、「年譜帳」、「暦注略年譜」、「手控え綴」とも同様、「本当に宝だ!」と。これ

からも、これらの資料をもとにして、更なる研究が進んでいかれることを願わせてもらいます。

今回は、こういう機会を与えて下さった研究所の先生方に御礼申させていただきます。本当に、ありがとうございました。

(鹿児島県・宮之城教会)

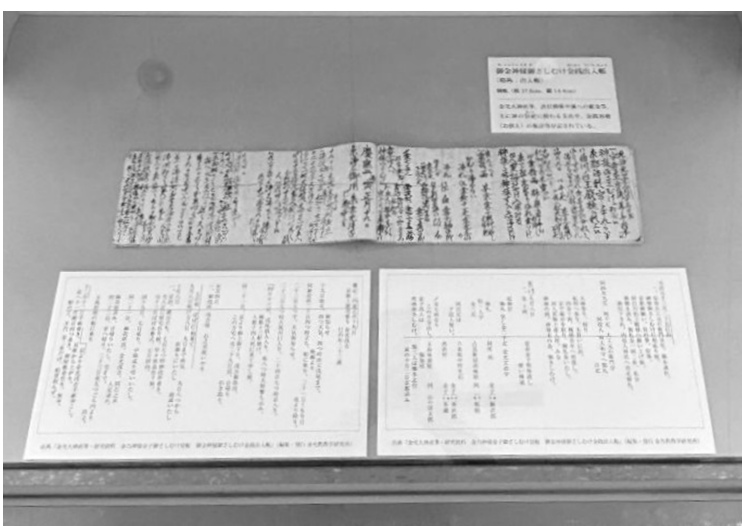
金光図書館 第一展示室「特別陳列」

「金光大陣直筆

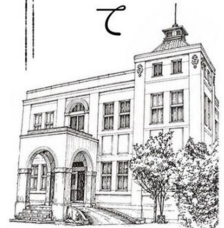
金乃神様金子御さしむけ覚帳

御金神様御さしむけ金銭出入帳」

※令和八年六月十四日現在



教学研究所を訪れて



幸田タマの軌跡を辿って

松山大学准教授 大石 茜



私は歴史社会学を専門としながら、帝国日本における植民地社会事業について調査をしていたところ、幸田タマという女性が福岡県

八幡市に設立した、在日朝鮮人向けの社会事業である丸山学院という事例を見つけました。幸田タマが金光教を信仰していたことがわかり、彼女の軌跡を辿るために、金光教教学研究所に問い合わせました。研究所では史資料が丁寧に分類、保管されており、研究利用しやすい環境でもとも助かりました。これまでの金光教の歴史をよく知らずに資料を見始めましたが、研究所のみなさんにとっても親切に対応していただき、関係者と連絡をとってくださったたり、これまでの『金光教学』に掲載された関連する論文を教えていただいたりと、大

変お世話になりました。

幸田タマによる丸山学院について、簡単にご紹介しようと思います。幸田タマは、一八八六年三月佐賀県の生まれです。師範学校に進学し小学校の教員になり、一九〇九年、結婚を機に福岡へ移りました。三人の娘が生まれましたが、夫がすぐに逝去してしまいました。タマは寡婦となり、小学校の教員を続け、福岡の姪浜尋常高等小学校に奉職し、その後八幡市高見尋常高等小学校へと異動となりました。タマが金光教に入信したきっかけは、この訓導時代です。奉職していた姪浜小学校には、熱心な金光教徒の児童がおり、その児童や家族の行いに感銘を受け、一九一二年に信者となったようです。

一九一九年頃から、昼間は小学校で働きながら、夜は朝鮮人のための夜学を開講し、一九二二年九月に丸山学院を設立しました。タマが暮らしていた八幡市は、多くの朝鮮人が八幡製鐵所で働いており、地域のなかで朝鮮人の人々が不平等な扱いを受け、虐められている様子を心を痛め、朝鮮人を支援する事業を考え始めたようです。夜学から始まった事業ですが、一九二八年度の事業報告によれば、主婦会、処女会、修養会、青少年団があり、新規事業として、幼稚園、婦人家庭女学院、模範農場、労働共済会朝鮮部を始める予定だと記されています。夜学のみならず、朝鮮人の女性や子どもたちを対象とした事業を展開して

いったことがうかがえます。

丸山学院で学び就職した者が、お礼にと毎月五十銭の寄付を送ってきたというエピソードがあり、丸山学院を通して安定した収入の得られる仕事に就けた者がいたことがうかがえます。通わなくなった後も親交があることを踏まえると、タマと丸山学院に通う朝鮮人とのあいだには信頼関係が築かれていたと考えられます。また丸山学院を介して金光教と出会い、熱心な信者となった者もいました。一九二九年発行の『金光教徒』では、八幡製鐵所で働く朝鮮人であり、後に金光教教師になる李元珪が、タマの講話に感銘を受け、金光教徒となったことが報じられています。丸山学院で勉学を学び、中学校や女学校、京城師範学校へ進学した朝鮮人もいました。

タマは一九三七年には丸山学院を手放し、朝鮮のトマンへ渡りました。豆満は、満洲との国境に近い朝鮮北部の僻地の農村です。タマは金光教のラジン教会長となるのですが、羅津は、鉄道が通る都市部の町で、満洲からの満鉄沿線の終着駅です。羅津教会は、金光教の朝鮮布教の最北地でした。タマは都市部の羅津で教会長を務めながら、豆満農園の経営や朝鮮人の学校経営にあたったようです。一九四五年に敗戦を迎え、一九四六年に家族は福岡へ引揚げていますが、タマは引揚げを拒み、朝鮮北部に残り、一九五三年六月に六十八歳で逝去(病死)したと言われています。亡く

なった際に関係者から家族へ届いた手紙では、タマを慕う村の人々や教え子たちの庇護のもとにあったそうです。

戦後でこそ、宗教家や宗教団体によって、在日朝鮮人を対象とするさまざまな事業や運動が展開しますが、戦前期に朝鮮人向けの社会事業を立ち上げた事例は稀有です。一人の日本人女性が、身近な場所でおこっている朝鮮人をめぐる差別的な境遇を問題に思い、行動に移せたことの背景には、信仰に基づくなんらかの信念があったのではないかと思います。女性が新しい事業を立ち上げることが難しい時代に、信仰心や信者の方々の繋がりが、タマの支えになっていたと考ええます。

宗教団体による社会事業は、宗教別または宗派別に研究されることが多く、帝国日本において宗教団体による社会事業が果たした役割や、その位置付けは、まだまだ議論されていないことが多く残されています。私自身はこれまで、キリスト教系の社会事業を中心に調べるが多かったのですが、金光教教学研究所の資料を見させていだくなかで、宗教による差異や類似性が見えてきて、大変興味深いです。宗教系の社会事業は、キリスト教が先行した事例が多いのも確かですが、キリスト教にはできなかったことが金光教の社会事業にはあったと思います。今回着目している丸山学院のような、戦前期の在日朝鮮人を対象と



した事業は、キリスト教系社会事業としては、内地の朝鮮基督教教会が担っていたものの、日本のキリスト教会では着手しなかったと思われる。宗教別の社会事業を比較検討する上でも、非常に重要な事例だと考えています。引き続き史資料を読みながら、金光教による社会事業の位置付けについて検討していきたいと思っています。

＝大石先生の著作紹介＝

大石茜『保育の帝国史』

いま子どもを守り育てていく環境ってどうなってるんでしょう。

何だか大きな国のリーダーたちが「権力」を笠に着て我が物顔のようにしているようで、古い時代に逆もどり？、そんな雰囲気を感じたりしますが…。この本は、そんな歴史の文脈、背景から、子どもが育つ環境を見つめなおすものとなっています。

信心で語られてきた子育てとか家庭への教えは、そこにどう関わっていただろうか。そんなことを考えると、おそろしくもあり、でも大きな視点で大事なことを捉え返させてもらえるような一冊です。

ちなみに、幸田タマ師の丸山学院のことも、この中で触れられています。



連載

後然なるまゝ

vol.4

いまさらながら

評議員 阪井 澄雄



三月の評議員会における教団の文書管理の話題から、文書（記録）になる前の会話などが、後で振り返ると大事な出来事の発端における、

緩やかな共通認識の一つだったのかしらと思えるものがあります。大概こうした遣り取りは「教内の大きな流れ」として纏められると、表立った記録に残らないもののようなので、見聞きしたり感じたりした者は、簡単にでもメモっておく、覚えておくのが役目に思えて、今回もそのような類の話です。

平成九・一〇年の制度審に先立つ課題懇談会的な会議で、後に中央で御用される面々でしたか、「立教神伝に替わる中心となると、やっぱり「天地書附」しかないよね」という休憩時間の遣り取りがあり、何故かという理由と思しきものは語ら

れていなかったと思います。その面々は、学院時代を「面白くなかったなあ」と回想しておられて、「立教神伝」の象徴する時代や空気の印象でしょうか。時代の空気といえば、私の知る出川学院長時代、「生神金光大神、日々御進展」とか、「君の灰皿はデカイの」と天地観を問うなど、禅問答的な語り口に感じるそれとは、大いに違っていたようです。

その後、正式な制度審に入って、「天地書附」にまつわる教祖様の御信心の歩みや時代の背景、御神名・御神号の出現や表記の時期・経緯など、その大切さを示す様々な知見が次々と集まった印象です。「天地書附」が新たな空気のアイコンを担って下さったのかも知れません。

また、時期が不確かなのですが、佐藤光俊先生が研究所に居られ、地方教務で御用していた私は研究員だったかOBだったかで研究生の勉強会に呼ばれ、「天地書附」と基本理念の位置付けについて思うところを話すように求められました。勝手が判らぬままに私見を述べたこと以外は記憶にないのですが、従前のお道の信心の要諦という位置付けや、何かにつけて唱えさせてもらう身近さの腑に落ち具合に比して、「基本理念というのは生煮えだと思えます」という纏めになったのは覚えています。済んでから「あんなんで大丈夫でしたか？」と佐藤先生にお尋ねしたようなことでした。

その後、佐藤内局の発足時、空気として、佐藤総長に寄せられていたのは、「制度改正時の分断を何とかしてほしい」「制度を元に戻せないか」といった声でした。それについて佐藤先生は、「自分は現時点で制度に手をつける意思はない」「『天地書附』が中心になるだろうと自分も思っている」「中身はこれから求めさせてもらわねば……」「分断（対立）の原因は、信仰の実態をもって制度化するのが従前の手法だったのが、今回は制度の改正を先行することで（布教を目指して）望まれる信仰を実態化するという順序になっていることにあると思う」「これから時間をかけさせてもらう」という筋合いで、ひとまとめではなく折々に思いを語っておられ、そのことは理事で認識を共有していました。

振り返るに、経験してきた信仰実態の醸成をもたす要素の一つは「運動」で、その歴史の大きな部分は「御取次成就信心生活運動」です。教務の主導によるとはいえ、歴代金光様の日々の御奉仕と先輩たちや我々の手許の信心の日常・実感を、「運動」の文言で意識化して紡ぎ続けて来た信心の営みだったとも言えます。三代金光様のご存在が大きいのは言うを待ちませんし、加えて、昭和二十四年に発足した「運動」が昭和五十年に新発足して平成を迎え、願われたところは、新たな運動の底流にも流れ続けて、すでに七十六年を超えています。

以後の他の名を冠する「運動」が目指してきたところは何か。私が教務所長時代に教区委員会での間に、大きく見れば「お道の御信心の中身に『伝える』ことが本来的に含まれている」と、信奉者みなが自覚的に再認識することだろうか。こう答えてみたのに対して、中央教務の経験も豊富な先輩が「そうやなあ」と頷いておられた記憶があります。

そう見做すとして、その大きな目標の実態化をはかるべく、教務として「対話」や「メディア」や「体制」とターゲットを変え、より良き視点や表現を求めながら取り組んできて、まだまだその途上にあつて真摯な吟味は終わりません。協議を重ねて「神人あいよかけよの生活運動」の骨子が決まった時、「やっと決まったなあ」と安堵の表情を浮かべた佐藤総長は、「考えてみたら、本教の信心そのままじゃなあ」と。

信仰や体制を意図的に方向付けることで、文言の流布・定着や、規程に沿った運用と活動は出来てゆくだけけれど、それを願ったとおりの実態化へとつなげることは容易ではありません。けれども、教師・信奉者一人一人の受け止めが何等かの言動となつていく日々の信心の積み重ねは、教務の意図通りとはいかないものの、どこかに充満・蓄積しているに違いないと思わされます。

その営為の重なりを受けてのことなら有り難いのですが、大きく捉えましたら、神様が人を助

けたいと思し召し、教祖様に取次を頼まれ、数多の人が助かり、今の何かと厳しい時代でも、ゆっくり少しづつながら、助かりが生まれ、お道が伝わっている事実があります。事象に後付けの解釈は出来るものの、それが意図や努力の結果だけでなく、それが意図や努力の結果だけでなく、むしろ極々平たい見方をしてもなお、神人の世界は広がり伝わってゆくエネルギーを内包しているのだと、改めて思わせられております。

(大阪府・東堀教会)



研究生入所式後、客殿外にて

最前列右———田邊 都

最後列左から三人目—西川道子

本教信心に関する資料の収集・保全にご協力下さい

本所では、本教信心に関する資料の散逸を防ぐため、教内各機関と連携・協力しつつ、あらゆる記録・資料類の収集と保全に努めています。教会や本教信奉者に関する資料、また明治末大正期の議会議事録や教内紙誌等の欠本分につきましても、随時収集を受け付けておりますので、下記担当窓口まで問い合わせ下さい。

- ・教会関係の書類など…本所資料室の他、最寄りのセンター、本部教庁総務部まで
- ・古い議事録や教内紙誌類、その他刊行物など…本所資料室の他、金光図書館まで

寄贈、複写の許可、または情報提供など、どのような形でも構いません。皆様のご協力が、教団の資料保全を確かなものにしていく上で大切な助けとなります。



研究生

田邊 都(愛知・金城教会)

私は、大学・大学院では法律を学んでいました。しかし、それはあくまで実務家を目指すための勉強であり、専門的に研究をした経験はありませんでした。また、教会子弟でもない私は、紀要を読んだことはおろか、金光教に研究所が存在していることすら、金光教学院に入学するまで知りませんでした。

そんな私が研究所に興味を持ち始めたきっかけは、私がこの世で最も尊敬する人の一人である在籍教会の親先生が、かつて研究所に所属していたと知ったことからでした。親先生の神様に対する姿勢は、教祖様にすぐ近いものがあると感じており、私にとって親先生は目指すべき憧れの存在です。研究所に行けば、私も親先生が感じて感じたものに少しでも触れられるかもしれない、そう考えるようになっていきました。また、学院での生活を送る中で、お道に対する疑問が湧き出てくるようにもなり、そういった疑問を自分なりに調べてみたいという思いも生まれました。

金光教の教師として研究させていただくからには、研究することが必ず人の助けにつながっていかねければならないと考えています。研究した経験もなく、お道について知らないことだらけの私にそのような研究ができるのかという不安もあります。神様がそんな私だからこそできることを与えてくださっていると感じ、これから一杯頑張っていきたいと思っています。



事務室(臨時御用奉仕)

西川 道子(滋賀・米原教会)

研究所で御用をさせていただくことになりました。謎に満ちていた研究所のことが少し分かってきました。皆さんご存じかもしれませんが本場に資料が沢山あります。想像の何倍もありました。私は、資料目録の打ち込みの御用をさせていただくことが多いのですが、色々なお教会の名前とか、信者さんや先生方の名前とか、ほんつとにいろいろ打ち込んだりしています。また、これは新鮮な

驚きだったのですが、あるとき資料に「金光大陣」と書いてあるのを見て、「ウワッ、ヤバッ！ホンマに『大陣』なんや、『陣』が『神』なんや！」と思って、気がついたら叫んでたり…。「管長」という言葉一つでも、「本や教典で見たことあるやつやん！」とテンションが上がります。時には、「ケフカイトフ(教会長)」と書いてある資料を見て、「ケツカイト」ってどういうこと？と、周りの人に聞いてしまうこともありました。そして、同じ滋賀県の教会の名前が出たりすると、「こんな昔からここのお教会あったんやな」と勉強になります。ほかにも、打ち込みをしていて気になったりすることがあると文献や資料を確認したりもでき、本当にありがたい所で御用をさせてもらうことになってよかったなと思います。また、教会誌の整理をしたときはその数の多さにびっくりしました。こんなにも沢山のお教会が色々な思い、願いをもって作られているのだなと。これからも、少しでも研究のお手伝いができるように御用をさせてもらいたいと思います。



事務局（臨時御用奉仕）

金光彩乃（岡山・本部在籍）

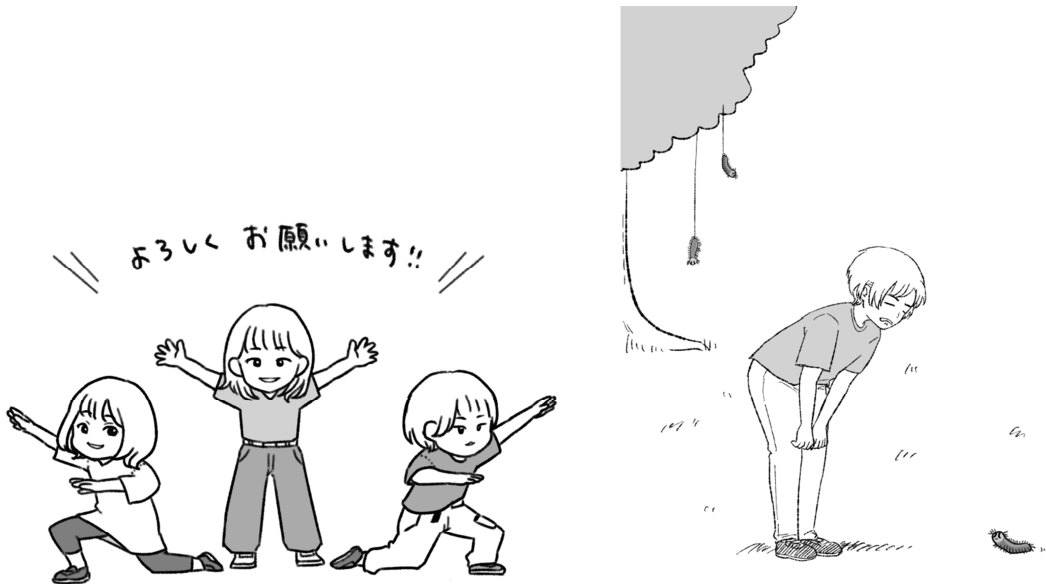
4月に入ってから、毛虫を見かける機会が増えました。洗濯物を干そうと外に出たときや、車での移動中など、思いがけない場面でふわふわと現れ、驚かされることもよくあります。正直なところ、あまり得意な存在ではありません。

思い返せば、令和元年に金光教学院に入学した頃も、毛虫が多く見られた年でした。自宅から学院へ心新たに出発したものの、最短距離で行こうとした道では上から降ってくることもあり、なかなか忘れたくないスタートだったのを思い出します。当時はただ避けるばかりでしたが、どこにいても目に入る状況の中で、次第に距離を保ちながら観察をするようになり、今まで気づかなかった一面が見えてきたのです。よく見ると、意外と愛嬌のある顔をしていました（シミュクラ現象で顔に見えるだけかもしれないが…）。

最初は戸惑いや苦手意識を抱くものでも、少し見方を変えたり、距離を取ったりしながら向き合うことで、新たな発見や理解につながるがあります。

研究所に対する想いにも、同じことが言えるのではないかと感じました。はじめは苦手意識でいっぱいだったことも、この環境で過ごすうちに、意外と面白さを感じられたり、捉え方が変わったりにしています。できれば毛虫ではなく、別のきつ

かけであってほしかったところですが、これからも一つひとつの出会いや経験を大切にしながら、丁寧に向き合っていきたいと思っています。



本所資料、

学会・国立博物館で

大活躍中！

本所所蔵の資料が、外部で新たな研究成果として結実しています！

学会誌への掲載や研究会での発表に加え、国立歴史民俗博物館のリニューアル展示では「申し渡しの覚」の複製も公開中です。

学術誌掲載

柳下草太氏の「明治末期の部落問題政策における宗教家の役割と実態―金光教の社会改善事業を中心に―」が、『部落史研究』第一一号（二〇二六年三月号）に掲載されました。

学会発表

石川義彦氏により、第一六一回三島中洲研究会（二〇二六年四月）にて、「小野懐之について―新出書簡の紹介を中心に―」と題した研究発表が行われました。

国立博物館展示

佐倉市・国立歴史民俗博物館の常設展示「近代」（二〇二六年三月十七日リニューアル）に、教祖の御言葉が記された「申し渡しの覚」の複製が展示されています。

彙報

令和7年
6月1日
〜
令和8年
5月31日

▲ 人事関係 ▼

一、職員

- 所長大林浩治、六月三〇日で任期満了。翌七月一日付で再任。
- 教師西川道子、七月一日付で臨時御用奉仕に採用。
- 教師金光彩乃、九月一六日付で臨時御用奉仕に採用。
- 主事滝口祥雄、一〇月二〇日付で広前部へ異動。

二、研究生

- 教徒田邊都、五月一日付で研究生を委嘱。

三、研究員

- 研究員高橋修一、一一月三〇日で委嘱期間満了、翌一一月一日付で再度委嘱。○研究員栗原隆治郎、四月一九日で委嘱期間満了、翌四月二〇日付で再度委嘱。

四、評議員

- 評議員大代信治、四月一九日で任期満了、翌四月二〇日付で再任。

※五月三十一日現在

所長、部長三名、幹事、所員一名、助手二名、
事務長、主事二名、臨時御用奉仕二名、研究生
一名(計一四名)、嘱託六名、研究員八名、評
議員五名。



花とお酒にさそわれて

高橋 昌之

教学研究所では、教外の研究者をはじめ、教師や信徒に限らず様々な方が訪れて交流を深めています。たとえば毎年三回ほど開催している「紀要論文講読セミナー」などでも、講義・懇談に続いて、参加者と一杯頂く懇親の場を持っています。が、こうした、お互いの近況や信心について自由に語り合う時間は楽しいものです。

また、右のような会合とは少し趣が異なるイベントとして、毎春、大祭期間中の休務にあわせて花見を行っています。研究所の庭には先輩方の植えた桜が並んでおり、かつては花見の季節になると提灯が飾られ、ぶらりと立ち寄った方が花を愛でていたとか。私が研究所に入所した二〇数年前は、庭で焚き火を囲みながらの夜桜見物でしたが、近年では天気心配がいらない大会議室で行うのが恒例に。今年も、職員の家族や霊地機関職員はもとより、所内外から約四〇名の老若男女が集う盛大な宴となりました。

花見は幹事を中心に準備が進められ、肉や魚が焼かれるなど、夕方の開会に向けてムードが高まっています。今年も開会を待ちきれない私と大林所長が乾杯の練習をしていると、職員からの口コミや風の噂を聞きつけた面々が一升瓶や缶ビールを抱えて続々と見えになり、会場のあちこちで乾杯が始まりました。

顔を眺めると、岩本徳雄先生や藤井喜代秀先生といった研究所の大御所OBをはじめ、大祭御用奉仕で霊地に滞在中の先生方、紀要論文講読セミナーの常連でもある信徒の方など多彩です。その中には、金光町内で天理教分教会長の御用をしておられる先生が、ニコニコ顔で皆さんと杯をかわしている姿も。陽気なこの先生は大林所長とPTAを通じた知人同士で、花見にはいつも駆けつけて下さいます。この夜も周りには自然と人の輪が出来ていました。

大人は酔っぱらって上機嫌となり、興奮した子どもが走り回るカオスな空間。普段は研究所と余りなじみのない方も集って楽しみ、語り合えるこうした場が、意外と教学の裾野を広げているのかも知れません。来年も開催しますので、ぶらりと立ち寄ってみて下さい。

(岡山・岡山教会)



SAKAMICHI



今年も通信『聖ヶ丘』を無事に発行させて頂くことができました。所外から玉稿をお寄せ頂きました先生方には、厚く御礼申し上げます。

さて、昨年の秋には、『金光大神直筆・研究資料「金乃神様金子御さしむけ覚帳」「御金神様御さしむけ金銭出入帳』を、発行させて頂きました。それに敏感に反応してくださったのが、松井教子先生。熱い思いのこもった原稿を研究所まで届けてくださいました。

また、今回、原稿を書いてくださった松山大学の太石茜先生もそうですが、遠いところから、はてはアメリカからでも、ご自身の研究のために研究所を訪ねて来られる方がおられます。その熱い思い、パッションには、頭が下がる思いがいたします。

四年もの間、『聖ヶ丘』に連載してくださった阪井澄雄先生、そして毎年「提言」として原稿をくださる研究員の先生方からも、研究所に対する熱いパッションが伝わってきて、我々にとっても、大きな励みとなっています。

かつて、お道の展開に尽力された先人たちも、総じて熱いパッションをお持ちだったのだらうと思います。それは伝染するもので、その影響を受けた人々によって各地に教会ができ、初代、二

代…と歴史が築かれていくことになったのだでしょう。そしてそこには、霊神簿、祭詞、御祈念帳、教会誌等、「みたまの記録」が残されていると思います。それらの記録にこめられた思いというのは、目に見えるものではないかもしれませんが、しかし、自分のことなど顧みず、人を救い助けることに尽力された先人たちの熱いパッションがあつたからこそ、ここまでお道が続いてきているのだと思います。その時代を生きた人たちが、どのような熱意を持たれていたのかを感じ、知ることは、今を生きる我々の信心に、深みや豊かさを与えてくれることでしょう。

このように思いを巡らせてみると、「みたまの祭り」は大切にせよ」との教えがありますが、「みたまの祭り」と同様に、「みたまの記録」も大切にしていかなければならないと思わされます。アーカイブとは、ある意味、「みたまの記録の保全」とも言えるからです。

形あるものは全て変わりゆくものではありませんが、先人たちが紡ぎ上げてきた財産が、かつてそこに確かにあつたパッションが、歴史の彼方に消えてしまわないように、「みたまの記録」を大切に保全し、そして未来へ繋ぐ活用ができるよう、教内のアーカイブの機運が醸成されていくことを願っています。②

通信ひじりがおか 第48号

発行・印刷 金光教教学研究所

〒719-0111

岡山県浅口市金光町大谷 1441 の3

電話 (0865) 42-3117

FAX (0865) 42-3119



メール kyogaku.secretary@gmail.com

ホームページ <https://kyogaku.konkokyo.jp>